# 言語社会研究科　博士審査要旨

論 文 提 出 者　　荒井　幸康
論　文　題　目　　「言語」の統合と分離　―1920－1940 年代のモンゴル・ブリヤート・ カルムィクの言語政策の相関関係を中心に ―
論文審査委員　　糟谷　啓介教授、イ・ヨンスク教授、坂内　徳明教授

## １．本論文の構成

本論文は、1920 年代から 40 年代にかけて、モンゴル（現在のモンゴル国を指す）、カルムィク、ブリヤート（ロシア連邦構成共和国であるカルムィク共和国、ブリヤート共和国を指す）においておこなわれた文字・言語政策の相関関係に焦点をあてることによって、「言語」の統合と分離の歴史的過程を明らかにしようとするものである。論文全体の分量は本文 136 頁、参考文献 12 頁であり、構成は以下の通りである。

**序章　モンゴル諸族文字・言語学会議**

**第１章　ソヴィエト連邦における言語政策（1920－1940）**

１－１　ラテン文字化政策期
１－２　キリル文字化政策期
１－３　「国際的」な語彙の問題

**第２章　モンゴル諸族の文字使用の歴史**

２－１　20 世紀以前から使われていた文字
２－２　20 世紀以降に使われはじめた文字

**第３章　ブリヤートにおける文字改革政策**

３－１　民族解放戦線と言語政策
３－２　ロシア革命後の言語政策
３－３　ラテン文字改革運動（1929～1938）
３－４　キリル文字化へ（1938～）

**第４章　カルムィクにおける文字改革政策**

４－１　改革前の状況
４－２　第一次キリル文字期（1924～1930）

４－３　ラテン文字化期（1930～1938）
４－４　再度のキリル文字化（1938～）

第５章 モンゴルにおける文字改革政策
５－１　背景
５－２　ラテン文字化へ（1930～1941）
５－３　キリル文字化へ（1941～）

第６章 ウラジーミルツォフの夢と現実
６－１　1929 年「モンゴル文語・ハルハ方言(ナレーチエ)比較文法」
６－２　ウラジーミルツォフの考えたモンゴル諸語の未来像

まとめ　「言語」の分離と統合

参考文献

## ２．本論文の概要

本論文でとりあげるモンゴル、カルムィク、ブリヤートはいずれもモンゴル諸族を構成しており、言語も共通のモンゴル諸語に属している。ブリヤートはモンゴル国の北部のバイカル湖東岸に位置し、カルムィクはカスピ海北西部に位置している。現在ではこの三つの地域に住む人びとは別々の民族とみなされ、言語も別個のものであるとみなされているが、著者は、こうした現在の状況が1920年代から40年代にかけておこなわれたソヴィエト連邦の言語政策によって定着したことを強調し、その言語の統合と分離の過程を具体的にあとづけようとする。

序章では、本論への導入として、1931 年 1 月 10 日から 17 日までモスクワでおこなわれたモンゴル諸族言語・文字問題会議が紹介される。この会議は、ソヴィエト連邦の新アルファベット全連邦執行委員会と民族・植民地問題研究学術研究協会の主催で開かれ、アカデミー会員であった言語学者ウラジーミルツォフとポッペ、ブリヤートの知識人でブリヤート語のラテン文字化に積極的に参加していたブリヤートの知識人バラーディン、カルムィクのラテン文字化運動を主導していた言語学者バドマエフらが一堂に会した。筆者は、カルムィクの立場に違いが見られるものの、この会議がモンゴル諸語の文字と正書法を統一しようとした試みであるととらえ、その歴史的意義を強調する。序章の後半では、これまでの先行研究の成果がまとめられ、モンゴル、ブリヤート、カルムィクを統一的な視点で論じる点に本論文の意義があることが示される。

第１章では、1920 年代から 40 年代までのソヴィエト連邦の言語政策史、とくに文字政策の変遷がふりかえられる。1922 年にアゼルバイジャンでアラビア文字の廃止とラテン文字化運動が起こったのをきっかけとして、1926 年にアゼルバイジャンの首都バクーで全連邦テュルク学会議が開かれ、その後テュルク諸語の文字統一をめざす運動へと発展した。1929 年 8 月 7 日には、ソヴィエト中央執行委員会で「ソヴィエト連邦内のアラビア文字を使用する民族の新ラテン文字について」という決定が下され、ラテン文字化運動はテュルク諸族だけではなく、ソヴィエト領内のほとんどの民族にまで拡大する。ラテン文字化の背景には、ソ連が進めていた識字教育、反封建反宗教運動、民族土着化政策などがあり、キリル文字には否定的な評価がなされていた。しかし、1930 年代前半からしだいに変化の兆しが現われ、1936 年にはラテン文字化が公式に否定され、1940 年代初めまでにはすべての民族語がキリル文字化されるに至る。著者はこのような方針転換の背景に、1936 年に社会主義段階を達成したとするスターリンの宣言があったと見る。これにより、ロシア語とキリル文字に象徴される「ソヴィエト」が「文明の源」としてイメージされるようになり、国際的な語彙はロシア語を介して民族語に導入される方針が定められた。

第２章では、モンゴル諸民族が用いてきた文字の歴史が述べられる。著者は、モンゴル文字、パスパ文字、トド文字、ソヨンボ文字、ワギンダラ文字の創生の経緯、普及の過程、使用範囲、ラテン文字、キリル文字の導入過程を簡潔にまとめ、モンゴル諸族の文字使用の変遷の見取図を手際よく示している。パスパ文字はフビライ・ハーンの命により作られた国際的音声表記文字であり、トド文字、ソヨンボ文字はサンスクリット語とチベット語で書かれた仏教文献を書き表すために発明された文字である。以上の二章は、本論への導入部の役割を果たしている。

第３章では、ブリヤートにおける言語政策が論じられる。ブリヤートでの文字改革の動きは、文化啓蒙運動と連動して 20 世紀初めから進められていた。ブリヤートにおけるラテン文字案の考案者であるバザル・バラーディンは、1910 年に仲間とともに『ブリヤート口承文芸選』をラテン文字表記で出版した。しかし保守層の反対などのために、このラテン文字案は大きな反響は呼び起こさなかった。ロシア革命後の 1923 年にブリヤート社会主義自治共和国が成立したが、しばらくは従来のモンゴル文字への支持が大勢を占めていた。しかし、ソ連全土で進められたラテン文字化の方針にしたがって、1929 年にはバラーディンの案と、中央連邦政府の新アルファベット委員会から依嘱を受けたポッペの案という二つのラテン化案が発表される。両者のちがいは、バラーディンがアルファベット 26 文字だけでブリヤート語を書き表そうとしたのに対し、ポッペ案は一字一音の原則で特別記号を付加した点にある。両者は激しく対立したが、中央の支持を受けたポッペ案が優勢となる。その後バラーディンは、1937 年にレニングラードで「反革命のスパイ」として逮捕され粛清される。1936 年にはブリヤート語の基礎方言が、モンゴル語の中心であるハルハ方言に近いセレンゲ方言から、東ブリヤートのホリ方言に移される。この変更はブリヤート語をモンゴル語から明確に分離させることにつながった。1938 年 6 月には、ブリヤート国立言語文学歴史研究所の言語会議でブリヤート語のキリル文字化が決定される。著者はこの決定に、1938 年からロシア語が学校教育で義務化されたこととの関連を見ている。

第４章では、カルムィクの文字政策が論じられる。カルムィクでは、1924 年から 30 年までの第一次キリル文字化、1930 年から 38 年のラテン文字化、1938 年以降の最終的なキリル文字化、というように方針が二転三転した。革命前からカルムィク語はトド文字で表記されていたが、1924 年 1 月の「文字に関する会議」でキリル文字化が正式に決定される。この時期の特徴は、カルムィク州領域内で独立した形で文字改革が進められた点にあり、著者は、カルムィク語が文字のかたちではっきりと姿を現わしたことにその歴史的意義を見ている。しかし 1930 年には州執行委員会幹部会でラテン文字化が決定される。このラテン文字化の中心となったのは、バドマエフの周辺に集まったサラトフ大学カルムィク学科の学者、学生たちであった。著者はサラトフという土地の独自性に注目し、内戦期にレニングラード大学の歴史家たちがサラトフに避難したこと、サラトフが多くの民族の混住するヴォルガ下流地域の中心都市であったことを指摘している。1937 年 12 月の共産党カルムィク州委員会はラテン文字の廃棄とキリル文字の採用の方針を定め、翌 38 年には新たなアルファベット計画案が承認された。しかし、カルムィクには大きな悲劇が待っていた。1942 年にカルムィク自治共和国はドイツ軍に占領され、43 年に解放された後、自治共和国は解消され、カルムィク人は全員シベリアに強制移住になった。カルムィクに帰還できたのは、スターリン批判後の 1958 年である。

第５章では、1924 年よりモンゴル人民共和国となり、1992 年にモンゴル国となった領域における言語政策の変遷が論じられる。モンゴルは辛亥革命後に自治を獲得し、1921 年のモンゴル革命を経て 1924 年に独立を達成した。20 年代には従来のモンゴル文字が引き続き用いられていたが、1930 年にモンゴル人民革命党大会でラテン文字がモンゴルの国字として採用された。しかしラテン化の影響はそれほど大きくなく、識字教育はあいわからずモンゴル文字で行なわれていた。モンゴルのラテン文字化運動を担ったのは主にブリヤート人であったが、モンゴルの指導者チョイバルサンはブリヤートの影響を危険視していたため、1937 年からの大粛清によってこれらのブリヤート人は次々と姿を消す。大粛清の終わった 1940 年にはラテン文字化が再開されるが実効はなく、1941 年 3 月には一転してキリル文字化が公式に決定される。著者は、この突然のキリル文字化の背後には、「ソ連邦との兄弟関係を強めるため」という政治的動機があったのではないかと推測している。ソ連崩壊後、モンゴル国と国名改称してからもキリル文字は相変わらず用いられている。

第六章では、モンゴル研究に大きな業績を残した言語学者ウラジーミルツォフ（1884～1931）の思想が検討される。ウラジーミルツォフはポッペとは異なり、言語政策に直接的に関与してはいない。しかし著者は、1929 年に刊行された代表的著作『モンゴル文語・ハルハ方言比較文法』を見ると、ウラジーミルツォフがモンゴル語の規範化をどのように考えていたかが理解できるという。それによると、ウラジーミルツォフはラテン文字化に反対し、モンゴル文章語にもとづく共通文語の成立を期待していたという。つまり、ラテン文字化によって各地域の音声言語を標準とすることで、モンゴル語の統一は崩されるととらえていた。むしろアラビア語がそうであるように、各地域の話しことばの差異を超えた正書法と文章語を成立させるべきだと考えていた。事

実、ウラジーミルツォフはブリヤート語とカルムィク語を独立した言語ではなく、あくまでモンゴル語の下位区分として把握していた。しかし、現実にはこのウラジーミルツォフの未来像とはまったく異なるかたちで、モンゴル、ブリヤート、カルムィクは各地域で独立した「言語」を成立させたと著者は述べている。

「まとめ」は「「言語」の統合と分離」と題され、これまで論じてきた各地域の言語政策の方向づけが包括的にまとめられる。著者は、「モンゴル語」「ブリヤート語」「カルムィク語」という三つの「言語」が成立していく過程には、「モンゴル全体を統合する動きと各地域へと分離していく動き」と「各地域内部での統合と分離の動き」が重層的にからまりあっているととらえる。前者はモンゴル文語からの距離をどうとるかという問題であり、後者は各地域の「言語」の基礎方言の選定の問題である。著者は、近代になって成立した「言語」「民族」は必然の結果として生じたのではなく、さまざまな可能性のなかの複数の意志のせめぎあいによって作り出されたものであることを強調して全体を結んでいる。

**３．本論文の成果と問題点**

本論文の成果として、以下の点をあげることができる。

第一に、1920 年代から 40 年代にかけてのモンゴル、ブリヤート、カルムィクの言語政策の変遷を相互のつながりのなかで複眼的にとらえることで、ラテン文字化からキリル文字化へというソヴィエト連邦言語政策の路線変更が、民族語に対して及ぼした影響の意味を具体的にとらえることに成功している。とくに言語政策の転換点をしるした重要な言語会議をもれなく俎上に乗せ、参加者を特定し、それぞれの報告と発言を資料のおよぶかぎり再現しようとした努力は高く評価できる。それによって、それぞれの民族語の内部で多様な立場が存在したことが立証された。

第二に、話しことばにもとづく正書法を成立させることが、それまでまとまりを保ってきた民族語に亀裂を入れる帰結を呼び起こしたことを明らかにすることで、民族政策における文字使用と正書法の問題の重要性が鮮明に描き出された。文字政策や正書法は、一見すると政治の領域から遠い問題のように見えるが、実はその背後に民族と言語をめぐる一定の政治的方向づけが存在したことを立証したことは本論文の最大の貢献である。こうした視点からの分析は他の地域の言語にも十分に適用が可能であり、本論文の成果は将来の豊かな研究領域を示唆している。

しかし、本論文には以下のような問題点もある。

第一に、論文の副題は「言語政策」と銘打たれているにもかかわらず、実際には文字政策がおもにとりあげられており、語彙、文体、標準化の問題について言及はあるものの、十分に論じられていないことは残念である。また、論述の中心が事実関係の立証におかれているため、言語造成(Ausbau)、ダイグロシア、言語接触、言語標準化などの社会言語学的概念を用いた理論的分析

が十分におこなわれていない。本論文での成果をこうした枠組みのなかでとらえかえすことができれば、より充実した成果が得られたであろう。

第二に、とりあげられた言語会議がおかれた政治的文脈、モンゴル知識人の思想的背景など、言語政策の背後に存在し、しかもそれに根本的影響をもたらしたであろう問題群へのまなざしが弱いことは惜しまれる。1920 年代から 40 年代というきわめてクリティカルな時代における言語問題を、よりひろい政治史、思想史、社会史の枠組みでとらえることができれば、本論文の成果はより豊かなものとなったであろう。たとえば、バラーディンの思想をより詳細に論じたならば、モンゴル知識人のおかれた困難な状況がうきぼりになったであろうし、ウラジーミルツォフの言語観は本論文の隠れたキーモチーフになっていると思われるにもかかわらず、十分に議論が深められていないのは残念である。

けれども、以上の問題点は筆者も十分認識しており、本論文の優れた成果を損なうものではない。多くの資料が散逸しているなかで頻繁に現地を訪れ、貴重な資料、証言を発掘した著者の努力は大いに評価されてしかるべきである。また、モンゴル、ブリヤート、カルムィクという三つの国および地域の言語問題をひとつのパースペクティブでとらえることができたのは、著者の問題意識の明確さと優れた研究能力の何よりの証左である。本論文で示された成果を基礎にして、研究をさらに発展させることが大いに期待される。

## ４．結論

以上の審査結果に鑑み、審査員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、本論文の筆者が一橋大学学位規則第４条１項の規定により一橋大学博士(学術)の学位を受けるに値するものと判断する。

最終試験結果の要旨

平成 16 年 2 月 18 日

論文審査担当者　　糟谷　啓介　　イ・ヨンスク　　坂内　徳明

平成 16 年 1 月 29 日、学位請求論文提出者 荒井幸康氏の論文および関連分野についての試験を行なった。本試験においては、審査員が、提出論文「「言語」の統合と分離――1920－1940 年代のモンゴル・ブリヤート・カルムィクの言語政策の相関関係を中心に」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、荒井幸康氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、荒井幸康氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。